

平成23年度 科学・技術関係予算概算要求 個別施策ヒアリング
24153 科学コミュニケーション連携推進事業（文部科学省）

- 1 日時：平成22年9月24日 15:25～15:45
- 2 場所：中央合同庁舎4号館 2階 共用第3特別会議室
- 3 聴取者：総合科学技術会議有識者銀 相澤議員、奥村議員、青木議員
外部専門家 4名（うち若手 2名）
内閣府 有松参事官
- 4 説明者：科学技術・学術政策局 板倉基盤政策課長

5 施策概要

自治体、科学館・博物館、大学・研究機関、公益法人等が身近な場で実施する科学コミュニケーション活動を支援する。

6 質疑応答模様

（相澤議員）活動自体は実績もあり良いが、こういう事業が色々な局面で切って、沢山並んでいて。それを一つ一つ適切かどうか判断するのが非常に難しい。具体的には、例えばSPP。パートナーシップ（の意味）を何度も聞いたが、主催の当事者が似ているところもあり、似ていないところもある。なぜこういう切り分けをして個別の事業を展開しなければならないのか、ここのところを説明頂きたい。

（文部科学省）先程のSPPは優秀な生徒をさらに引っ張り上げるのが主眼。科学コミュニケーションは、むしろ科学技術、理科数学の裾野を広げるという観点。科学未来館、科学博物館に代表されるような博物館。広く一般の人を対象として科学、理科の理解を深める、関心を引き起こすという活動。これをさらに草の根活動を支援。大きな拠点のみならず、日本全国に広がるように支援するのが目標。対象者が違うというのが大きなポイント。

（相澤議員）それを切り分けて実施しなければならない理由を積極的に説明して欲しい。共通して出てくるのは、科学館であり、博物館であり、大学であり。対象だけが違うと言うことで切り刻んで事業を作るのが、どうしてもそうしなければならないのか。もう少し説明してほしい。あと関連はもっと他にないのか。類似施策。SPP以外に。

（文部科学省）例えば、理科教材を作るなど。広く科学技術を広めるための支援策は色々講じている。サイエンス・パートナーシップの方が対象を絞るという意味で特異、特殊かもしれない。最終的には優秀な若手研究者へのパスを早めから作っていく。対象を絞り込む。プログラムの中身を作り込んでいく。

（相澤議員）JSTが全ての事業を総括している。JSTも切り分けが難しいのではないかと察する。サイエンスコミュニケーションというポイントから立ち上げてきた事業を、全体像として整理していく段階ではないか。それはできないか。私自身、非常に整理に困っている。例えば、サイエンスアゴラは、どの事業に入っているか。

（文部科学省）科学コミュニケーション連携推進事業。資料の真ん中にサイエンスアゴラがある。

(相澤議員) JST に答えてもらうのが良いと思うが、それぞれの事業が、長い期間やってきたものの次の展開どうするのか。かなり困っているのでは。次々と新しい事業が立つのが果たして良いのかどうか。是非、全体像を見せて頂きたい。

(相澤議員) 改めて資料を作り、説明する。基本的には先程の通りだが、今一度整理して、説明する。

(文部科学省) JST。サイエンス・パートナーシップ・プロジェクトと科学コミュニケーション推進事業は、実施はほとんど同じ。大きな違いは、学校教育現場と直で科学コミュニケーション活動、理科実験活動をサイエンス・パートナーシップ・プロジェクトという形で1つにまとめている。各都道府県の教育委員会と密接に連携しながら活動しないと、学校の教育現場に踏み込めない。科学コミュニケーション推進事業で広く活動するよりは、SPP という括りを作った方が、全国の学校とうまく連携できる。JST として整理して活動を推進している。

(奥村議員) 具体的なイメージが湧きにくい。国民の科学技術の関心を深化させる、1つはリテラシの問題。全国規模のネットワーク支援を2企画やっていると書いてあるが、具体的にどんな姿のものをやっているのか。イメージが湧かない。

(文部科学省) 1企画は20年ほど活動実績がある青少年の科学の祭典。全国大会があり、各都道府県で地方大会。20年ほど実績があるが、この3年間強化ということで支援している。もう1つは、日本では初めて。ハンデキャップを負った人。科学に対して意欲のある人の才能を引き出す。視覚障害者の子供達を対象に、視覚障害者の青少年のための科学へのジャンプというイベント。年に一度。全国的に地方大会。こちらの支援。今年阿蘇で。科学のジャンプという大会を実施。

(外部専門家) 週に1回くらい国立科学博物館に行っている。大学から出展した特集が組まれている。展示が素晴らしい。多分こういうところからお金が出ていて、子供達が楽しんでいるのを見ると、お金が有効に使われていると思う。東京がいるから体験できる。地方に行くとはほとんどできないというのが一番の心配。地方のネットワーク支援のところを力を入れても良いのでは。科博でやっているのは素晴らしい。大学のオープンキャンパスがばかばかしいくらい素晴らしい。地方の大学が遠くからやってきて、細かく説明。地域にも是非広げて行って欲しい。予算はこう組まれているが、地域に対しての配慮を大きくしていけないといけない。日本全体のサイエンス盛り上がっていない気がする。コメントです。

(相澤議員) こういう非常に対象の範囲が広いところに焦点を置いているのは、事業の全体の進め方は難しい。似たような施策があっちにもあり、こっちにもあるように見えるので、体系的に整理した形で、それぞれの焦点が何なのか、そこからこういう効果が期待できる、整理する中で明確にできると思う。是非お願いしたい。

(文部科学省) わかりました。

以上